



TITLE:

# 計算貨幣と交換貨幣

AUTHOR(S):

福井, 孝治

---

CITATION:

福井, 孝治. 計算貨幣と交換貨幣. 經濟論叢 1928, 27(1): 90-115

ISSUE DATE:

1928-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129648>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號 一 第

卷七十二第

行發日一月七年三和昭

## 論 叢

一般社會學の概念

文學博士 米田庄太郎

經濟靜態について

文學博士 高田 保馬

目的稅論

法學博士 神戸 正雄

保險と偶然

經濟學博士 小島昌太郎

## 說 苑

計算貨幣と交換貨幣

經濟學士 福井 孝治

經濟法の概念

經濟學士 橋本 文雄

## 雜 錄

希臘現代の經濟學

法學士 山口正太郎

大戰中の佛蘭西の通貨

經濟學士 島 本 融

フォン・ペロウ教授を憶ふ

經濟學士 上田藤十郎

獨逸都市の財政統計

經濟學博士 沙見 三郎

說苑

計算貨幣と交換貨幣

福井孝治

今日の社會に於いては、交換は吾々の經濟生活の根本的條件であり、吾々は交換關係に入り込むことなくしては生きて行くことは出来ない、そうして、少く共經濟生活に關する限りに於いては、此の交換と云ふ社會的紐帶によつて各人が連繫されることによつて、社會が一つの全體的な社會として成立してゐる。斯様な根本的意義を持つ所の交換は、勿論、直接交換ではなくて間接交換であり、而かもそれは單純なる間接交換ではなくて其の最高發展形態たる貨幣交換である。直接交換は當事者双方の欲求が丁度都合よく調和した時にのみ起り得るものであるが、當事者双方の欲求が丁度都合よく調和するが如きことは偶然的であり、若し貨幣が消滅するならば吾々は忽ち生活に窮しなければならぬ。今日の私有財産と分業との上に立つ社會に於いて各人が各自の生活を維持し得る所以のものは、一般的交換手段たる貨幣が存在する爲めに外ならない。

貨幣は今日の巨大なる社會的經濟生活の機構の運轉に必要な油である。

斯様に今日の吾々の經濟生活は交換を根本條件とし、貨幣は、一般的交換手段として根本的な重要さを有するものであるが、今日の經濟生活を觀察する時、吾々は交換以外に貨幣と不可分離の關係に在る所の、他の事實を發見する、其れは價格である。通常吾々が價格なる語を使用する場合に、吾々は其れに根本的に異つた二つの意味を持たしめて居る。第一の意味に於ける價格は、實際の交換取引に於いて一單位の商品に對して現實に支拂はれる具體的な貨幣額としての價格である。然し乍ら斯くの如き意味に於ける價格の存在は、一般的交換手段としての貨幣の存在と同一であつて、別にとり立てゝ舉げる必要はない。何故なれば、一般的交換手段としての貨幣が存在する時は、交換は常に販賣及び購買の形態を探り、商品一單位に對して一定の割合で貨幣が支拂はれることは當然であるからである。

吾々は尙異つた意味に價格なる語を使用する。其れは、現實に支拂はれる具體的な貨幣額としての價格ではなくて、吾々が財に歸屬せしめる所の、貨幣單位によつて計算された特殊な數量としての、抽象的な觀念的な、價格である。今日に於いては總べての財は、假令それが現實に商品としての流通界に存在せず、既に購買されて工場に於いて或は家庭に於いて生産又は消費の用に供されて居やうとも、それと同種の財が商品として現實に市場に於いて賣られてゐる計りではなく、其の所有者が賣らうと思へば何時でも賣られ得る可能性を有するものであつて、現實に又は潜在的に商品であり、吾々は此れ等を貨幣單位に於いて評價することによつて、分量的にのみ異

れる所の特殊な數量としての價格の負擔者として觀察することが出来る。斯くの如くにして品質的に異れる一切の財が吾々の觀念に於いて分量的にのみ異れる數量に還元させられる。即ち私が茲に第二の意味に於ける價格と云ふのはマルクスが『諸商品の價格或は貨幣形態は、それらの價值形態一般と同じやうに、それらのものゝ手で掴むことのできる實在的な物體的形態とは異なることの、それゆゑにたゞ觀念的な、または觀念されたる、一形態である。』と云つて居る場合の價格である。此の價格の觀念性 (Idealität des Preises) と云ふことはアモンなども強調して居る様に常にこれを牢記して居ることが必要であると思ふ。

それぞれ品質的に異れる總べての種類の財が、吾々の觀念に於いて、分量的にのみ異れる數量に還元されると云ふことは今日の經濟生活の最も大なる特徴である。これによつて始めて計算としての營利 (Erwerb als Rechnung) 計算としての經濟 (Wirtschaft als Rechnung) が可能となる。ゾムバルトが資本主義の特徴として Rechnungsmässigkeit 又は Rechenhaftigkeit と云ふことを挙げ、複記簿記と資本主義との關係に就いて『複式簿記を伴はない單なる資本主義なるものを考へることは不可能である。其れ等は相互に形式と内容との關係に在る。そうして資本主義が複式簿記に於いて其の力を發揮する爲めの道具を見つけ出したのか或は複式簿記が其の精神から初めて資本主義を生み出したのか分らないであらう。』と云つてゐるのも此の點を指したものである。

以上述べた様に貨幣は一般的交換手段たる計りでなく、それは觀念的形態としての價格の單位たるものである。今、貨幣を、一般的交換手段たる機能に着眼してこれを見る時交換貨幣 (Tausch-

- 1) 岩波文庫版資本論第一卷第二分冊 149 頁、
- 2) Amonn, Objekt und Grundbegriffe der Theoretischen Nationalökonomie 1927 S. 320 ff.
- 3) Sombart, Der Moderne Kapitalismus II S. 118

scheld) と名づけ、觀念的形態としての價格の單位たる機能に着眼してこれを見る時計算貨幣 (Rechengeld) と呼ぶならば、交換貨幣と計算貨幣との關係に就いて貨幣論上極めて重要な問題が起る。交換貨幣と計算貨幣と何れが優位を占む可きであるか、交換貨幣たる所のものは必然的に計算貨幣であり又計算貨幣たる所のものは必然的に交換貨幣であるか何うか、等の問題がそれである。近時此れ等の問題について最も犀利なる分析を行つたのはゴットルである。從來の見解では、一般的交換手段としての貨幣の方に重きを置き、これから觀念的價格の單位としての貨幣の方に説き及ぶのが普通であるが、ゴットルに於いてはこれと逆の行き方をして居る。私は以下に於いて彼の著『經濟的ディメンジョン』の第三章に於ける彼の所説の概要を紹介して見やうと思ふ。ゴットルが『經濟的ディメンジョン』と呼んでゐる所のものは、私が先きに現實に支拂はれる貨幣額としての價格に對して第二の意味に於ける價格として擧げた所のものに相當する。私は以下で紹介に於いても『經濟的ディメンジョン』なるゴットルの新造語を避け『觀念的形態としての價格』なる言表を使用する。尙、次手に斷つて置くがゴットル自身が Rechengeld (計算貨幣) 及び Tauschgeld (交換貨幣) なる語を使用してゐる譯ではない、彼自身は此れ等に相當するものとして Zahlung (勘定貨幣) 及び Zahlung (支拂貨幣) と云ふ彼特有の語を使用してゐる。然し Zahlung という言葉よりは Rechengeld と云ふ言葉の方が一般に使用され、又 Zahlung なる言葉は所謂 Zahlungsmittel としての貨幣と甚だ混同され易い、而して此の兩者を混同してならないと云ふことはゴットル自身の明言してゐる所である。従つて私は『支拂貨幣』と云ふ様な誤解され

易い言葉よりはアモンなども使用してゐる様に『交換貨幣』と云ふ言葉の方がよいと思ふ。其れ故に私はゴットルの所説を紹介するに當つても必しも彼の言表に拘束されることなく、計算貨幣、交換貨幣と云ふ語を使用して置く。

## 二

吾々は先づ原始的交換の考察から出發しやう。

恐らく原始的交換程習慣に因はれてゐるものはあるまい。氏族と氏族、種族と種族、民族と民族との交通として、原始的交換が一度び成形せられるならば、それはその乗り込んだ軌道を何時迄も嚴格に保持して居るであらう。然し交換の方向が固定されるだけではない、交換比例も亦習慣によつて固定される。交換物の分量、其れに參加する者には動搖變化があるであらうけれども、交換比例は變らないであらう。第一に、傳統に因はれた經濟生活に於いては計算の能力が發達してゐない、計數の觀念の發達してゐない程益々一度與へられた交換比例に執着することになるのは當然である。第二に、斯様な經濟生活に於いては、交換比例など、云ふ點には可成り鈍感である。交換はほんの補充に過ぎないから、其れが少し計り損であらうと得であらうと、全體として大した影響はない。それ故に事情の變化があつても交換比例は同一であり得る。第三に、斯様な鈍感と是非結びついてゐることは慣れない事柄に對する不信用と云ふことである。人々にどつては從來通りに行ふのが一番安全だと考へられる。斯くの如く種々の理由によつて交換比例は固定的にされて仕舞ふ。

勿論、斯様な固定的な習慣的交換比例は、それが固定的な習慣的交換比例として成立する爲めには、何等かの比例に於いて固定されなければならない。それが全くたわいもない點に固定されることは考へられない。何故なれば、そうでなければ、環境への適應即ち交換など云ふことは無意味になるからである。總べての交換に先立つて、それぞれ異つた財の間に、交換比例の標準となる所の一定の分量的關係なるものが存在することは明かである。例へば大きな家畜と小さな家畜とは同一の廣さの牧地で同一の勞働で飼養し得る頭數に差があるとか、或は卑近な例で云へば、一袋の砂では何もすることは出来ないが小な石でも寶石ならば立派な裝飾になる、と云ふ様なことから起る分量的關係である。古くから經濟學理論に於いて交換比例決定の標準として勞働が最も重要なものとして取扱はれて來たが、此の場合に勞働が標準となるか何うかは極めて疑しい。比較の基礎となるのが、支配し得る他人の『勞働』の出費なのか自己の『勞働』の犠牲なのか、これが明確でない計りではない、原始的交換に於いては交換によつて獲得する所の物は、原則として、全く自己の生産することの出来ないものであり、如何なる比較も不可能であるからである。如何に勞働なるものが顧慮されないかは、例へばアリューシャン列島の土人等は、彼等に一掴みか二掴みかの煙草をやるならば、女子の幾年もの勞働が含まれてゐる所の、獸筋で織つた精巧なシャツ數枚を喜んで與へた、と云ふ様なことを見ても分る。勿論、斯様な交換比例は後には自然に矯正されるであらう。理由は簡單である、男子の煙草は早くなつて仕舞ふのに女子は仲々新しいシャツを作り上げない、と云ふ結果になるからである。然し斯くの如く交換比例に影響を及すのは單



に勞働のみではない、交換に先立つて財の間に存在する所の分量上の諸關係がすべて影響を及するのである。然し吾々は、原始的交換當事者等を近代人の様に合理的に思惟する者と考へ、所謂「評價」なるものを彼等が行ふと考へてはならない。謂はゞ半盲目的な模索によつて充された長い間の序曲を経て、始めて交換比例は一定の點に落ち着き習慣的交換比例なるものが成立するのである。

以上に於いて原始的交換に於ける交換比例は全く習慣によつて固定されてゐると云ふことを述べた。然らば斯様な習慣的交換比例と觀念的形態としての價格との關係は何うであらう。斯様な習慣的交換比例と同時に觀念的形態として價格が発生するか、と云ふ問題に對しては勿論否と答へなければならぬ。觀念的形態としての價格なるものは、現實の價格によつて決定され而かも現實の價格を決定する一要素となるものであるが、其れが全然歪められずに現實の價格として市場に於いて實現される必要はない。觀念的形態としての價格は各種の財に附着せる所の分量的にのみ異なる特殊な數量であるが、斯様なものを原始的交換に於いて見出すことは出來ぬ。假令、剩餘生産物の譲渡によつて獲得するのを常とする財が、更に他の方面に於いて他の財と交換されて居ると云ふことを知つてゐるとしても、即ち例へば七匹の小牛に對して一匹の馬を獲得してゐる所の者が、他の方面に於いて馬と劍とが二對一の割合で交換されてゐると云ふことを知つてゐるとしても、事情に變りはない。唯々今日の吾々にとつてのみ交換比例の換算を行ひ、劍一本は十四匹の小牛に値すると云ふことを知ることが可能である。吾々は原始的交換者に對して換算と云ふ様な難事を強制してはならない。單純な經濟生活に於いては全く計算と云ふことを必要としな

いものである、斯様な換算は何等の實際上の重要性をも持たないものである。劍と交換して馬を獲得すること、或は馬と交換して劍を獲得することは、他の經濟單位に屬する事柄であつて、自己の經濟單位に關する事柄ではない。假令斯様な交換を自ら行ふ様になつた所で、換算は決して吾々が考へる程直接に重要なものではない。

計算に慣れた今日の吾々は、原始的交換に於いても劍と小牛とが換算の率に従つて交換され、小牛十四匹で馬一匹を獲得出来るかの如く假定して仕舞ふ。然し吾々は、原始的交換は常に一定の固定された方向に於いて行はれ、全く習慣によつて因はれてゐると云ふことを忘れてはならない。だから、他の方面に於いて劍一本に對し小牛が十四匹でなく、二十匹の割合で交換されてゐる、と云ふ様なことは原始的交換に於いては全く可能である。今日の吾々の眼には斯様な交換比例は不合理なものとしてうつる、そうして吾々は直ぐ次の様な考へ方をする。例へば同一の市場に於いて、小牛と馬とが七對一の割合で、馬と劍とが二對一の割合で、小牛と劍とが二十對一の割合で交換されてゐるとしやう。人は小牛を持つて來て、假令自分の目的は馬でなく蜜であらうとも、先づ七對一の割合で馬に換へ、更に馬を二對一の割合で劍に換へ、更に又これを一對二十の割合で小牛に換へることによつて、十四匹の小牛で二十匹の小牛を獲得することが出來、従つて又それだけより多くの蜜を獲得することが出来る。馬を有する人に就いても劍を有する人に就いても同様のことが云へる。それ故に斯様な交換比例は到底長く維持され得なくなる、と斯う云ふ風に考へる。然し乍ら原始的交換に就いて斯くの如き考へ方をするのは次の三點を忘れてゐる。

即ち第一には、原始的交換に於いては此處に云ふ様な意味に於ける市場なるものは存在しない。假令同一の場所に同一の時に交換者の種々なる群が集合しやうとも、習慣的の交換當事者の間に習慣的の交換が行はれる丈けである。第二には、所謂「經濟の根本法則」として前述の様に「需要供給の法則」が支配權を得る前に、交換比例の動搖性と云ふものが生じなければならぬが、原始的交換に於いては此の交換比例の動搖性なるものが存在しない。第三には、原始的交換に於いては、交換を巧く結合して利益を得ると云ふ様なことをする者は存在しないのである。交換は習慣に従つて行はれ、交換比例全部を通算するなど、云ふことは不可能である。

右に述べた様に原始的交換に於いては習慣が支配し、且つ自給自足が主であつて極めて僅かの財が交換されるに過ぎない。一種の財は他の多種の財ではなく、僅かの種類の財と交換されるに過ぎない。假りに漸次或る特殊の財が同時に多種の財と交換される様になつたとしても、まだ觀念的形態としての價格の生じない點には變りはない。此の場合には同一種類の財に對して、他の各種の財への色々な交換比例が何等の連絡もなく並存する丈けである。今日の様に各財の諸交換能力が貨幣によつて統一されて表現される、と云ふ様なことはない。

然らば一體、觀念的形態としての價格なるものは如何なる經路を採つて發生したものであらうか。それが贖罪制度 (Talionssystem) と云ふ様なものから起元を發する、と考へられないこともない。或る一定の犯罪に對し、二匹の牛若しくは一匹の羊、七匹の牛若しくは四匹の馬、十匹の牛若しくは一本の劍、と云ふ様に贖罪物が代替的に決められ、其の何れの一對に於いても一つが

牛と云ふが如き同一種類の財である場合には、贖罪物相互の斯様な關係から貨幣及び觀念的形態として價格なるものが發生したと考へられないこともない。然し乍ら此の兩者を直接關係づけるには餘りに基礎が薄弱である。そこで吾々は貨幣及び觀念的形態としての價格の根源を交換の中に求めなければならない。

一般に採用され、そうして特にカアル・メンガーによつて主張された所の、見解は、ある一種の財が他の財に比し益々頻繁に交換される様になり、遂にはそれが、交換手段として、交換される二物の中の必ず一つを占めるに至つて交換貨幣が起り、同時に又此の財を基礎として他の總べての財が一定の數量に還元されるに至つたと見る見解である。即ち、今、Aなる財を有し之に對してBなる財を欲する所の、人があるとする。此の場合に、若し彼が幸にも、Bなる財を有し之に對してAなる財を欲する所の、他の人を見出すならば、此れ等兩者の間には交換が成立するが、然らざれば交換は停滯する。所が幸なことには總べての人々は、Gと云ふ特殊の財が一般に愛好され『最も流通性に富む』財である、と云ふことを知つてゐる。其處で第一の者は、他の何人からか交換によつてGなる財を獲得し、これを交換手段として第二の者から彼の欲する所の財Bを獲得することが出来る。何故なれば第二の者は、假令彼の欲求するのはCなる財であつて、直接Gなる財を欲するのではなくとも、Gなる財は『最も流通性に富む』財であつて、更に之を交換手段としてCなる財を獲得することが出来る、と云ふことを知つてゐるからである。斯くの如く、『最も流通性に富む』財Gが一般的交換手段として使用されることによつて、交換の停滯は一掃さ

れ、交換は油を塗つた様に障害なく行はれるに至る。斯くて、此の『最も流通性に富む』財が貨幣となるのである。以上が一般の見解である。

斯様に、メンガアの、そして又一般の、見解によれば、『最も流通性に富む』財が交換手段として使用されることによつて、無貨幣時代から貨幣時代へ忽ち移るのであるが、吾々に直ぐ疑問になるのは、以前には『直接』交換のみが行はれてゐた場合に、如何にしてGなる財が『最も流通性に富む』所のものとなり得るか、と云ふことである。第一に、人々が此の財の最大の『流通性』を知る前に既に可成りの程度に交換が行はれてゐたと見なければならぬ。で、今Gに相當する財を假りに家畜だとしやう。そうすると、第二に、從來は剩餘生産物の交換が行はれてゐたのだから、交換者が二派に、即ち家畜を豊富に有する者等と然らざる者等とに分かたれてゐた、と考へなければならぬ。第三に、家畜を豊富に有する者等は、一樣の欲求即ち同種の財に對する欲求のみを持つてゐてはならない。何故なれば、そうでなければ、二種の『最も流通性に富む』財があることになるからである。それ故に何うしても、ある者は甲なる財を、他の者は乙なる財を、と云ふ様に、多様な欲求を充足する爲めに、家畜を豊富に有する者等は然らざる者等と交換を行つてゐたと考へなければならぬ。宜しい、此處までは譲歩して置かう。眞に疑はしいのはこれからである。其の多様な欲求を満す爲めに家畜を豊富に有する者等は、常に彼等の相手方を發見することが出來たのである。そうでなければ『最も流通性に富む』財なるものを生ずる程直接交換が盛に行はれることは不可能である。所が驚いたことには、急に總べての人々が盲目になつて仕舞

つたかの様に、彼等は相手方を見出すことが出来ない、と云ふのである！　そうでなければ交換は停滯するに及ばない。然し『間接』交換の一般的发展と云ふ様な決定的な變化が起る爲めには、交換は停滯しなければならない。だから、相手方を發見する能力を急に失つて仕舞つた、と云ふことになる。若しも斯様な意地悪い解釋を容認することを欲しないならば、次の様な解釋があるだけである。即ちGなる財は、『最も流通性に富む』所のものとして『間接』交換を引き起したのではなく、逆にそれ以前に『間接』交換の成立に寄與する所があつたことによつて、『最も流通性に富む』ものとなつた、と云ふ解釋である。然し所謂最高の『流通性』と云ふ特徴が全く存在しないのに如何にして斯様な財を掴み當てることが出来るであらうか。『間接』交換の活潑な交換取引の媒介者になる爲めには、明かに其れは、そのこと以前に何等かの特徴を持つてゐなければならぬ。其の特徴が最高の『流通性』でないとするれば何であらう。それは觀念的形態としての價格の單位たることである、即ち計算貨幣たる機能を持つことである。

原始的交換は全く傳統主義の中に動いてゐる。之に反し今日の様に財の交換能力が貨幣と云ふ明星によつて統一的に表現されると云ふことは、合理主義を偲はせる。此處では、複雑な交換取引が觀念的形態としての價格に基いて行はれ、『計算』としての『經濟』が行はれる。それは正に傳統的經濟と合理的經濟との對立である。そこで吾々は、苟も原始的交換の核を破る助けとなる所のものは、それが『間接』交換の發見であらうと何であらうと、傳統的に束縛された經濟への合理的なるものゝ侵入、と結びついてゐなければならぬ、と云ふことを知る。

『間接』交換、迂路を経ての交換、は勿論傳統的經濟に於いても存在する。然し乍ら、第一に、此の『間接』交換は、第二歩目にはすぐ自己の欲する財を獲得出来る様な今日の『間接』交換と全く異り、不便な、文字通りに迂路を経ての交換である。第二に、此の迂路を経ての交換は、傳統主義と全然調和する所のものであつて、決して此れを打ち破る所のものではない。傳統的經濟が破壊される爲めには、何處からか合理主義的考へ方が其の中へ侵入して來なければならぬ。

原始的交換は、原則として、習慣的に決められた方向に動いてゐる。其れ故に交換のいつもの相手方が交換を拒むか、或は強い新しい欲求の起つた時にのみ、間接交換が起る。

今、例によつて説明する爲めに、A B C D E等の氏族があり、AとBとは密と小牛とを三對一の割合で、BとCとは小牛と馬とを七對一の割合で、CとDとは馬と劍とを二對一の割合で、最後にDとEとは劍と小牛とを一對二十の割合で、習慣的に交換してゐたと假定する。『間接』交換は、既に述べた様な特別な事情の出来た場合にのみ起る。そこで、Cが或る時戦争か何かの爲めに劍——Cは自分の馬とDの劍とを二對一の割合で交換するのを常としてゐた——に對する必要が増加し、その爲めに、Bに對し小牛と馬とを交換してやることを拒んだとする。Bは色々あつて見た結果、次の様な遁れ路を發見することも出来やう。即ちBは、Eと共にDの所へ行き、自己の小牛に對して、勿論二十對一の割合で、先づ劍を讓渡して貰ひ、而る後其の劍を携へてCの所へ行き馬を獲得する。此の際Bは、從來よりもより、『高價』で馬を獲得したと云ふことに氣がつくか何うか、それに就いては何等決定的なことは云へない。が然し何れにしても交換比例の齟

餌など、云ふことは彼等にとつて考へる可く余りに困難なことであらう。斯様な迂路を経ての交換は、何等の影響をも残さない。翌年は恐らく總べてがまたその通りに回復するであらう。更に又他の時、Eが突然馬を必要としたと假定する。彼は、前に世話してやつたBと共に、Cの處へ行くか、或はDからより多くの劍を獲得しこれを携へてCの處へ行つて、馬を獲得する。Eは、此れ等の方法の中、何れか一つのみを行なつて馬を獲得する。それ故に其の二つの方法の間に於ける『價格の差』とも云ふ可きものについては全く氣が付かないであらう。況んやそれを算出するとも云ふ様なことに至つては、勿論不可能である。再び『間接』交換は跡形もなく消えて仕舞ふ。幾度も同様のことが繰り返されるであらう。要するに『間接』交換は舊來の『直接』交換の補充であつて、これを破壊する程有力なものではない。

ところが、此處にAなる氏族がある。此の氏族は、其の富裕な隣人と異り、森林中を徘徊せる狡猾な人々であり、彼等の暮しをよりよくする爲めに漸次劍を必要とするに至つたが、Dは彼等の蜜に對して劍を交換してやることを肯じなかつたとする。狡猾なる氏族Aは、間もなく、習慣によればDの處へは小牛か馬を持つて行かなければ駄目だ、と云ふことを知るであらう。そこで手近かの遁れ路としてAは、舊來の交換の相手方たるBからより多くの小牛を獲得し、此の餘分の小牛を持つて形式上Eの仲間入りしてDの處へ行き、劍の分け前に與かる。所がAは、Eと別れなければならぬことが出来、翌年には他の方法を發見しなければならなくなつたとする。そうして、今度は、何時もの様にして得た小牛を、先づ馬に換へ、之を更に劍に換へると云ふ方法を發見したとする。



儲、Aは、前年と殆んど同量の蜜と小牛との交換を行ひ、前年に三本の劍を得たとすれば、今年には四本の劍を獲得することが出来る。前年の近い善い道による方が今年の遠い悪い道によるよりも却つて結果が悪い。此のことは如何にA氏族を驚かすであらう。斯様な矛盾は彼等をして考へさせずにはおかぬ。そこでA氏族のみに、而かも以上述べた様な特別な場合にのみ、起り得る所の或る事柄が起る。それは彼等が交換に關して計算を始めると云ふことである。勿論それは、交換の現場で給付物や反對給付物を計つて渡す、と云ふ意味の計算ではなく、觀念の中に於いて諸交換比例の關係をはつきり數量的に算出すると云ふ意味の、計算である。其の合理主義的立脚地のお蔭で遂にAは、今日の吾々にとつては自明なことだが、一本の劍は一つの方法では六十單位の蜜に、他の方法では四十二單位に相當する、と云ふことを知るに至るであらう。

斯様にしてAは、交換について漸次精密な計算を行ふ様になるが、遂に此處に一つの新事實を發見する、即ちそれは、交換過程を巧く結合することによつて『利得』を得ることが可能である、と云ふことである。そこでAは此の知識を實際に應用し蜜をB氏族に於いて小牛に換へ、その小牛をC氏族に於いて馬に換へ、更にその馬をD氏族に於いて劍に換へ、更に又その劍をE氏族に於いて小牛に換へるであらう。斯くして『商業的營利』が生れる。交換比例は固定してゐる。だから、劍と小牛との交換比例は依然として一對二十であり、Aは常に劍一本につき六匹の小牛に相當する利得を擧げることが出来る。初めの中はAは、斯様な營利を行ふ爲めに、蜜の生産を必要とするであらうが、漸次、利得を得る爲めには必ずしも蜜に執着する必要がない、と云ふことを

覺る様になる。Aは利得として得た小牛を、交換を巧く結合して、他物に換えて行くことによつて營利を行ふことが出来る。斯くの如くにしてAは、漸次自ら生産を行はず、交換によつて得た利得によつて生活を營むやうになる。彼等は、『交換を職業として』即ち利得の獲得者として生活し、『交換に訴へて』即ち自給自足の代りに購買者として、生活するやうになる。斯くの如くにしてA氏族の經濟は、傳統的に眠つた經濟から合理的に交換の上に建説された經濟に轉化し、傳統主義のたゞ中への合理主義の突入として現はれる。

勿論、斯様な商人の發生は、まだ周圍の世界に何等大なる變動を引起さない。交換の相手方として商人が頻繁に現はれる様になつても、習慣的交換比例は依然として存在し、他の氏族等は依然として傳統的な經濟を營んで居る。斯様な固定的な習慣的交換比例を打破し、より以上の發展の契機となる所のものは、商人同士の交換である、即ち多數の商人が現れ彼等の間に交換の行はれるに至ることである。此のことは、何等習慣によつて束縛されない全く新しい所のものを生み出す。勿論商人の間にも習慣——商慣習——が生ずる。然し第一には、此の習慣は固定的でなく、總べての變化に對して適應性を持つてゐる。第二には、此の習慣は交換比例を固定せしめぬ。商人間の取引、商人の集合、は恐らく幾千年もの間固定されてゐた所の交換比例を動搖状態に陥らす。

商人等が固定的な交換慣習から離れて相互に接觸するに至る時、始めて本當の意味に於ける市場が成立する。商人等は相互に需要供給を行ひ、總べての交換關係が彼等を通じて連續される、

そうして彼等の間には固定的な交換比例は消滅し、交換比例は時と共に動揺する。

商人等の接觸は、すぐに彼等の間に競争を生み出す譯ではなく彼等は各々自己の領分を占有してゐるであらうが、彼等相互をしてより多くの利得の獲得を可能ならしめる。即ち前に挙げた例で云へば、A氏族は小牛と馬とを七對一の割合で交換することを餘儀なくされてゐたが、他の商人は他の彼の領分で、例へば五對一の割合で其れ等の交換を行つてゐたとする。今彼とAとが接觸するに至るならば、Aは、彼の相手方たる他の商人が五匹の小牛で得た所の馬一匹に對して六匹の小牛を提供することが出来る。此の場合に、相手の商人は馬一匹につき小牛一匹の利得を獲るが、Aも亦今や小牛十二匹で一本の劍を得ることが出来、其れを小牛二十四匹でEに譲渡すれば、劍一本につき八匹の小牛を利することが出来る。

商人が利得を獲る爲めには交換を巧く結合することが必要であり、それには計算が必要である。所が商人と商人との接觸は此の計算を困難ならしめる。第一に、商人は今迄と異つた態度で交換を行はなければならない様になる。同業者との接觸によつて、今迄と違つて利得獲得の可能性をば總べて豫め明白に算出しなければならない様に益々なつて来るが、交換の連鎖は増加し甚だ計算が複雑になる。第二には、習慣的交換比例の外に商人間の『商買上』の交換比例が生じ、これは時により状況により動揺し始める。第三には、商人間の取引は習慣的交換其のものを不安定にする。例へば前例のC氏族の状態を考へて見よ。商人相互の交換が始つて以來、AはCから馬を持ち去らなくなる。恐らくまた其れと同時に、Cは其の習慣的交換の相手方たるB氏族及びD

氏族をも失ふであらう。斯様な窮況から脱する爲めに、Cは他の商人と接觸せんとするであらう。此のことは、Cにとつては商人等の間に存在する所の、あの本當の市場に参加することを意味し、A以外の他の商人によつてはAの領分への侵入を意味する。斯くの如くにして競争が起る。然しCは同時に又一匹の馬に對して、以前の様に七匹の小牛ではなくて、六匹又は五匹の小牛を以つて満足しなければならなくなり、市場以外に於いても習慣的交換比例が破壊される。商人間の競争は漸々意識的になる。Eも、今迄は廿對一の割合で小牛と劍とを交換してゐたが、斯様な不利な交換比例を改める様になるであらう。此れ等の新しい交換比例が、再び習慣的になるかも知れない。然し乍ら兎に角固定的な交換比例は弛緩したのである。

然し茲に甚だ重大なる困難が起る。それは、商人等のみが感ずるのであるが、また彼等にとつては堪え難い所のものである。方向に於いて、分量に於いて、全く混亂してゐる所の交換取引を、はつきりと見渡すことは甚だ困難になる。然るに商人にとつては此れについて明確な智識を持つことが必要である。然し乍ら益々色々な方面へ擴つて行き、益々長い連鎖に入り込んで行く所の、諸交換比例を通算することは、遂には不可能にならなければならぬ。商人は常に、彼が交換によつて獲得する所の、或は獲得し得る所の、一定の品物について利得の計算をしなければならぬが、今や、此れ等の品物の他の諸物に對する交換能力は益々紛糾して、利得の計算はいよいよ困難になる。そこで各財の交換能力の統一的な表現が最も必要となる、悉しく云へば、それぞれの財の一單位に附屬して居り、そうしてその財が入り込んで居る所の總べての交換比例を謂

は、それ自身の中に止揚してゐるかの様な、同一呼稱の數量が必要である。

斯くの如くにして吾々は今や、觀念的形態として價格が商人にとつて如何に重要であるかを、よく理解することが出来る。それによつて、一定の期間に獲得される所の、或は獲得可能として豫想される所の利得の合計、營利の爲めに必要とせられるもの、合計、が可能となる、即ちそれによつて「計算としての營利」が可能となる。商業的營利は其の目標が數量的であるから必然的に計算的である。

俗、觀念的形態としての價格が一度實際問題となるならば、何から單位を採るか云ふこと、換言すれば貨幣單位を提供する所のもの、選擇が問題となる。吾々は觀念的形態としての價格に對して必要な單位を與える所のものを計算貨幣と名づけやう。計算貨幣と觀念的形態としての價格とは相互に制約し合ふ。計算貨幣が無ければ觀念的形態としての價格はないが、後者を生むことによつてのみ或る物は計算貨幣となる。

其の性質上、單位的に分量的であり、そのことによつて凡ゆる計算の根本條件を提供するものゝみが、計算貨幣たり得る。その單位は、『二匹の牛』『一個の貝』『一枚の狐皮』と云ふ様な自然的な單位であつてもよい、或は度量衡による單位、即ち『一升の鹽』『一ヤールの貝紐』『一磅の金』と云ふが如きものであつてもよい、或は更に計算貨幣としての機能の爲めに人工的に作られた所の單位——此の場合には純金二分を一圓とすと云ふ様に度量衡による單位が註釋として伴ふか、或は一馬克は三分ノ一タアラアに等しと云ふ様に、他の單位に對する關係が掲げられるが——であ

つてもよい。全く特殊な條件の下に於いては「神話的」な單位——名稱に於いてのみ存在し、實物としては既に亡びて仕舞つた様な——の使用も考へ得られる。

右に述べた様な特質を持つたもの、中何が選ばれるか。商人の間に於いて最も頻繁に取引される品物が選ばれることもあらう、或は後に述べる所の交換貨幣としての機能を豫想して全く他の品物が選ばれることもあらう。然し、最も頻繁に取引される品物が選ばれるとしても、第一には、それは夜盜の様にこつそり貨幣の役目に忍び込むのではなくて、自己の必要をよく知つてゐる人々によつて意識的に選擇されるのである。第二には、その目的は交換を容易ならしめるよりも寧ろ最初は「計算としての營利」を可能ならしめることに在る。第三には、斯様な選擇から、始めの中には、一般の人々に影響するやうな何物も起らない。總べては交換及び比例に就いて知識を有する人々、即ち狭い商人仲間内に於いて行はれる。

然し此の商人仲間内に於いては、勿論當該選擇は商慣習の中に於いて完成されなければならない。選擇は、何等かの協定から出發し、其の協定に他の人々が自發的に従ふと云ふ様にして行はれやうとも、實際上の結果から見て「公事」となり、商人仲間の内に於いて、需要供給、値付け、拒絶等總べての行爲が、特殊な數量即ち觀念的形態としての價格を基本として行はれる様にならなければならない。其れ以前に個々の人々が、自分丈けで、一種の財の單位を基本として總べての交換比例を換算した、と云ふ様なこともあり得やう。例へば、前に舉げたAと云ふ氏族が、蜜又は小牛を謂はゞ「個人的貨幣」として使用した、と云ふ様なこともあり得るであらう。此のこと

は、彼等に對し交換比例の通算を殆んど全く容易ならしめなかつたであらうけれども、二三の指針を與へたであらう。然し商人仲間全體に亘つて、取引が一定の財を基礎として行はれるに至つて始めて、交換に於ける全比例關係が明確に統一的に表はされる。動搖的交換比例の連續的系列の代りに、今や動搖的數量の連續的系列が生じ、其の數量は各財に其の特有の數量として附着する。

觀念的形態としての價格の發生は、最初は交換取引自身には何等の變化を與へない。例へば商人間に於いて最も頻繁に取引される品物が計算貨幣として選ばれた場合に、これが爲めに其の商品は最初は少しも其の流通性を増加しはしない。逆に今迄市場に於いて取引されない様な品物が選擇されたとしても、それはこれが爲めに市場取引の中へ巻き込まれはしない。況んや市場外の交換をや、市場の内に於いてさへ舊態依然たりではないか。交換は原則として『自然』交換である。然し此處に一つの例外が生ずる。何故なれば、商人の相互的需要供給の間の不平均が存在する場合に、殘餘部分に對して計算貨幣たる財を代位せしめて、此れを『清算』する様になるであらうからである。

然し間もなく計算貨幣は『間接』交換に於ける交換手段として使用されるやうになる。供給に對する需要の不存在、或は需要に對する供給の不存在と云ふことは甚だ起り易いものであり、斯くの如き場合には、今迄でも既に迂路を経ての交換が行はれたが、習慣の總べての束縛を持たない商人は特に斯様な交換を爲す能力を備へてゐる。それ故に吾々は、彼が第二步目には目的物を獲

得出来るやうな最も近い迂路を経ての交換を常に行はんとしてゐる、と見てよいであらう。最も近い迂路を経ての交換を爲すのに如何なる財が適當であるかは市場の状況に依存する。市場に於いて自己の欲する所の品物を全く入手することが出来ず、次の市場迄待たなければならぬやうな時には、一時、代位物を反對給付として受け取つて置くのが好都合であらう。この爲めには『最も頻繁に取引される』財が最上であることは明白である、そうして商人は何が最も頻繁に取引されるかをも知つてゐる。然し第一には、これが爲めには市場に供給された商品中の最も頻繁に取引される所のものが問題となるだけであり、第二には、市場に於ける商品の流通性、被愛好性の程度によつて選擇が動搖する。之に反し、既に計算貨幣たるの役目を持つた所の財に就いては全く事情を異にする。其れが以前に『最も頻繁に取引される』財であつたと否とに關しない。それは『間接』交換の媒介を早晚獨占して仕舞ふ、此の財の媒介は自づから最も近い迂路の交換に導くからである。何故と云ふのに此の財は、他の財に比し無比の優位——それは單なる程度の問題ではない——を占めることによつて、讓渡にも受納にも同様に歡迎される。

何故此の財が實際の交換上の利益の爲めに受取られるやうになるかと云ふに、それは『清算』の場合に於いても『間接』交換の場合に於いても極めて明瞭である。『清算』の場合に、計算貨幣の役目を務めてゐる所の財の一定分量によつて、殘餘部分を支拂ふならば、何が起るか？ 殘餘部分は此の財の單位に於いて算出されてゐたのである、それ故に此の單位に於いて考へられてゐた所の勘定を、同一單位に於いて現實に支拂つたゞけである。『間接』交換の場合にはもつと明白であ



る。此の場合には特に、考へられてゐた所のものが自然と現實へ轉化する。計算貨幣が存在するならば、二物は、多少の差はあるが、大體に於いて其れ等のもの、觀念的形態としての價格を標準として交換される。所が、此の觀念的形態としての價格なるものは、計算貨幣の單位に於いて考へられてゐる。供給商品に對して需要商品が存在しないならば、貨幣單位に於いて觀念されてゐた所のものが、貨幣單位に於いて實現されるのは當然である。此の場合には、供給商品に對して需要商品が存在しないのであるから、交換は其の本來の目的はこれを達しない譯であるけれども、人は彼の供給商品が妥當する所のものを得ることが出来る。何故なれば、供給商品が換算されてゐる所の貨幣單位を現實に受け取るのであるから、供給商品の具體化されたる『價值』を受け取ることになるからである。貨幣單位に於ける計算が、同じ單位の具體的な讓渡と云ふ形式に於いて實現される場合には支拂が起る。斯くの如くにして、計算貨幣として作用してゐた所の財が交換に於いて現實に支拂はれる所の貨幣として現はれる。

總べての支拂が計算を前提とすると同様に、計算貨幣が既に存在しないならば交換貨幣は現はれない。貨幣的計算、貨幣單位に於ける計算の方が、交換に於ける貨幣使用、即ち交換貨幣の受授よりも必然的に先行する。觀念的形態としての價格を見落してはならない。交換貨幣が端初ではないのである。尙又流通性の單なる程度上の差は交換貨幣を基礎づけるものではない。『最も頻繁に取引される』財が、少く共それ自身として、貨幣になるのではない。逆に既に貨幣の役目——勿論それは計算貨幣としての——を務めてゐる所の財が、必然的に『最も頻繁に取引される』

財となり市場の常客となるのである。

以上述べた様に或る種の財の計算貨幣としての役目の方が本源的であつて、交換貨幣としての役目は、それから引き出されたものである。計算貨幣たる所のものは同時に交換貨幣たるを要しないが、交換貨幣は同時に計算貨幣である。

交換貨幣として現はれる財は、交換に入り込んでゐる總べての財の中、最も交換され易いものとして認められなければならない。これが爲めには其れは種々の特質を具有することが必要である。例へば、分割性、持続性、一般的使用性、運搬性等がそれである。これ等の諸特質を最もよく具有するのは貴金屬である。如何なる財が交換貨幣たるの役目を引受け長く其の役目を維持するかは、此れ等の諸特質に於ける優秀さによつて決定される。それ故に、金屬製の道具が、木製骨製石製の道具を驅逐したと同様に、貴金屬が貨幣として完全に勢力を占める。然し此のことは純事實的の經過であつて Gold を Gold の誤植と解してよいと云ふ程な根本的な事柄ではない。

前述の諸特質の具有如何によつて、財の交換貨幣に對する適性が決められるが、これによつて交換貨幣の役目其れ自體が決められる譯ではない。交換貨幣使用の根柢には、常に貨幣的計算が横つてゐる。貨幣單位を現實に數へ上げることによつて實現される所のものは、貨幣單位による計算として常に思惟に屬してゐる事柄であり、これは、交換及び其の比例を精神的に克服する必要の中に深く根をおろしてゐるのである。それ故に、交換に於いて反對給付として支拂はれる貨幣によつて、商品が妥當する所のものが姿を顯はにし、それに於いて、商品の『價值』が具體化さ

れ、其の觀念的形態としての價格が眼に見えるものとなるのである。兎に角、交換に於ける貨幣使用は根本的な『貨幣機能』としての計算貨幣迄溯及しなければならない。「間接」交換の媒介者として貨幣を観察する時、主として分割性・持續性……等の諸特質のみが顧みられたが、或る物は、計算貨幣として使用され其の故に交換貨幣となるに至る、と云ふことに比すれば、此れ等の諸特質は第二次的のものである。

以上述べて來た所によつて次のやうな結論に達する、即ち或る物は『交換手段』として貨幣になるのではなく、貨幣として不可避免的に『交換手段』となるのである。

## 三

以上がゴットルの所論の大意である。

ゴットルの所論に對して色々な疑問が起るであらう。果してゴットルの云ふ様に、發生的に見て計算貨幣が交換貨幣よりも優位を占めるか何うか、は大いに疑はしい。純粹に抽象的な貨幣的計算によつて複雑なる交換比例を精神的に克服する、と云ふが如きことは、具體的な交換手段の——其れは勿論今日の如き完成せられたる形態に於ける貨幣であることを必要としない——所謂商品貨幣(Warengeld)と呼ばれてゐる所のものであつてよい——受授なくして何うして可能であらう。エビツヒなども云つて居る様に、子供が抽象的な數を取扱ふ前に計算機の具體的な感性的な玉の動きによつて計算と云ふことを教へられると同様に、具體的な交換手段の受授があつて始めて觀念的貨幣計算が發展し得るのではなからうか。ゴットルは『今迄市場に於いて取引されな

い財」即ち商品でない財が計算貨幣として使用せられる可能性を認めて居るが、斯くの如き財が如何にして計算貨幣となり得るのか理解することが出来ない。ある財が計算貨幣となる爲めには其の財と諸多の財との過去の交換比例についての経験なくしては全く不可能であらう。何故なれば、そうでなければ此の財と諸多の財とを觀念の中に於いて關係せしめ價格を算出する爲めの何等の標準も存在しないからである。少く共、計算貨幣たる所の財は、假令それが現在市場に於いて流通してゐなくとも、過去に於いて流通して居つた所の——そうして恐らくは最も流通性に富むで居た所の——財即ち商品であつたことは絶對的に必要であると思ふ。

尤もゴットルの様に、計算貨幣は同時に交換貨幣——或はゴットル自身の語で云へば『支拂貨幣』——たることを必要としないが、交換貨幣は同時に計算貨幣たることが必要であると始めから決めてかゝるならば、如何に或る財が交換手段として一般的に受授され様ども、それが同時に計算貨幣たる機能を有しない限りは交換貨幣とは云ひ得ない譯になり、計算貨幣交換貨幣の問題は、術語の上の問題に轉化する恐れがある。例へば塊太利に於いては、グルデン紙幣の爲めに在來のグルデン銀貨は市場より驅逐され、交換手段たる機能はグルデン紙幣が獨占したけれども、グルデン銀貨は人々の意識の中に於いて存在し觀念的な價格の單位として使用され、一グルデン（紙幣としての）は一グルデンよりも價值が少い、と云ふが如き奇現象を呈したが、ゴットルの立場よりすれば、此の場合に於けるグルデン紙幣は交換貨幣とは云ひ得ないことになる。

吾々の實踐と吾々の意識とは相互に關係し合ふ。計算貨幣の發展なくしては交換貨幣の發展は不可能であるが、交換貨幣の發展なくしても計算貨幣の發展は不可能であり、純粹に獨立の貨幣計算、貨幣意識なるものは論理的にも歴史的にも存在し得ないであらう。